

朝日ジャーナルは何だったのか－元編集長・筑紫哲也の遺言

メディア文化研究所
招聘研究員 稲垣 太郎

要 旨

朝日新聞社が発行した週刊誌「朝日ジャーナル」は戦後日本の重要な歴史を刻む硬派雑誌であった。1960年代の高度経済成長と表裏をなす日米安保に対する反対運動や、70年代の全共闘、新左翼運動のうねりを詳細に報じた。「右手に『朝日ジャーナル』、左手に少年マガジン（平凡パンチ）」と言われるほどの人気を博した。ミーイズムに象徴される非政治化の80年代に、新人類と呼ばれた若者たちの新しいカルチャーのムーブメントを次々と紹介するなど、誌面を刷新したが、多くの雑誌を持ちきれないという社の経営判断から廃刊に追い込まれる。

同誌がそれぞれの時代を刻んだ存在意義は何だったのか。編集長を務めた筑紫哲也氏にインタビューした。同氏はテレビキャスターとしての仕事も、「朝日ジャーナル」時代の経験がベースになっていると語った。「多事争論」を同誌でもテレビ番組でも掲げた筑紫氏だったが、情報量は膨大な時代にあって、「論」が弱まっていることに懸念を表明した。東日本大震災やTPP、中韓との領土問題や歴史認識での軋轢、それに伴うナショナリズムの台頭など、今こそ、こうした問題に真正面から取り組み、問題提起をする雑誌が必要なのではないか。インターネット社会における報道のあり方や質を問う意味からも、「朝日ジャーナル」が残した足跡は今もなお色あせていない。

キーワード

朝日ジャーナル、報道・解説・評論、新左翼運動、知的虚栄心、
筑紫哲也、多事争論、下村満子、志の雑誌

英文要旨

'The Asahi Journal' published by 'the Asahi Shimbun' in 1959 was one of the intelligent type weekly magazine which reported important issues about pollution problems, social movements, and anti-nuclear weapon, anti-treaty of mutual cooperation and security with U.S., etc. (But this magazine was abolished in 1992 because of minus management.) Firstly I introduce this magazine's role and achievement of reporting many issues in 1960's-70's.

Secondly I interviewed with Mr. Tetsuya Chikushi who was one of the outstanding TV casters, also had been the chief editor of 'The Asahi Journal' in 1984-87. He focused the cultural movement of especially young artists who called 'New Homo sapience'. In the interview, he emphasized the importance of the experience as the chief editor of the magazine, because that would be the base of editing and producing television journalism program. And he had a kind of anxiety of the people that would not have enough argument and considering though they have much information from digital media.

In Japan we have many problems such as Higashi Nihon arthquake, TPP, friction with China and South Korea, nationalism and patriotism. I am sure that a magazine like 'The Asahi Journal' should be necessary for us to cover these problems just now.

1. はじめに

朝日新聞社が1959年3月に創刊した週刊誌「朝日ジャーナル」は、戦後日本の歴史を刻む重厚な硬派の雑誌だった。60年の日米安保条約改定で盛り上がった社会運動を詳細に記録し、60年代後半には最高の27万部を発行。70年代に入っても、新左翼運動を背景に、政治や社会問題が若者を中心に熱く語られる時代状況にあって、つねにその論争や背景解説をリードし続けた。

しかし、80年代の総中流化によるミーイズム、生活中心主義の保守化傾向の中で埋没し、92年5月、休刊に追い込まれる。

全共闘が猛威を振るった70年代初めには、「右手に『朝日ジャーナル』、左手に少年マガジン（あるいは平凡パンチ）」と言われるほど、街に持ち歩くとかっこよく見える知的な小道具として、若者たちの人気を博した。特にその時代の記事内容は、新左翼的な思想を背景にした難解な論考が多く、決して多くの一般国民にとって読みやすい誌面ではなかった。

にもかかわらず、多くの若者が街を歩く際に手に取っていたことは、この雑誌がコンテンツによって消費されること以上に、一つのファッションとして受け入れられたことを物語っている。ファッション雑誌ではない、硬派の雑誌がその内容を理解しない読者もファッション性に魅了され、消費されていたからだ。

本稿では、この雑誌が持つ魅力や読者に伝えようとしたメッセージは何だったのかを探るため、まず過去に発行された雑誌本体を検証し、その中で特集された歴代編集長の思い、それぞれの時代に同誌が取り上げた大きなテーマを追った。時代と格闘しながら、なぜ休刊の憂き目に至ったのか。休刊から15年を経た現在から見た「朝日ジャーナル」の存在意義は何か。また、同誌に代表される硬派雑誌が今なぜ不振なのか。これらの答えを得るために、1980年代に編集長を務めた筑紫哲也氏（故人）に、2007年1月にインタビュー

した。（本稿は筆者が修了した早稲田大学大学院社会科学研究科の社会連帯論Ⅱ＝2007年後期＝のレポートを加筆・修正したものである）

2. 主な歴代編集長の回想

2.1 知識人を擁し論陣を張る

「朝日ジャーナル」創刊の1959年（昭和34年）から休刊の92年（平成4年）までの33年間で、16人の編集長が誌面作りをリードしてきた。日本の新聞社の組織の中では、新聞本体を作る編集局とは別に出版局が雑誌や書籍の発行を担っており、朝日新聞社も同様に、「朝日グラフ」と「週刊朝日」に加えて、「朝日ジャーナル」の発行は出版局が行っていた。

創刊25周年にあたる1984年、編集長に着任した筑紫哲也氏は「25年の軌跡」と題する臨時増刊号を4月15日に発行、全ページで特集を展開した。当時話を聞ける限りの歴代編集長から証言を集め、コラムにしている（資料を参照）。彼らの証言によって、それぞれの時代に「朝日ジャーナル」が取り組んだ具体的な課題が鮮明に浮き上がる。

さらに、それぞれの難題に立ち向かった彼らの呻吟も聞こえてくるようだ。

初代の和田斉編集長によると、ICBM開発に象徴される米ソ冷戦の激化の中で、「報道、解説、評論」を3つの柱として「朝日ジャーナル」は立ち上げられた。加藤周一、辻清明、篠原一、高見順、美濃部亮吉、都留重人といった日本を代表する知識人を擁し、彼らの企画をもとに編集部員が記事をまとめていった。一方、国内では60年安保闘争が激化し、女子学生が国会議事堂前で死亡する事件が起きた。これを記録した号は即日売り切れ、増刷されるほどだった。

時代の勢いに後押しされて、「朝日ジャーナル」の発行部数は69年に最高の27万部にまで順調に伸びていく。2代目の岡田任雄編集長は「部内の空気は明るく活気に満ちていた」と回想している。草の根民主主義、ベトナム戦争、植民地から独立

したアジア、アフリカ諸国の動静、成田空港誘致闘争、沖縄問題、大学闘争など、テーマに事欠かず、こうした深刻な国際問題や社会問題に対する人々の関心は高かった。

2.2 記者が逮捕され存亡の危機

ところが70年安保と全共闘デモの嵐を経て、「朝日ジャーナル」は存亡の危機に直面する。71年8月22日、陸上自衛隊朝霞駐屯地の自衛官殺害事件（朝霞事件 注を参照）に関する証拠隠滅の疑いで、同誌の編集部員が逮捕されたのだ。折しも編集方針の新左翼的傾向の行き過ぎが社内外から問題にされており、事件がこの動きに追い打ちをかけた。非難の電話や投書が相次ぎ、2月19日、連合赤軍による浅間山荘事件、リンチ殺人事件が発覚。一部の週刊誌は「朝日ジャーナル」を「連合赤軍の培養基」とさえ書いた。販売部数は低落、広告も激減した。「廃刊せよ、との声も社内から出るほど」（玉利勲編集長）だった。

新左翼を中心にした社会運動が冷え込む中で、「朝日ジャーナル」の誌面を勢いづかせたのは、米国史上最悪の政治スキャンダルといわれたウォーターゲート事件報道だった。公聴会の記録や筑紫哲也ワシントン特派員の現地報告などで、他誌を圧倒する報道を続けた。第4次中東戦争に端を発した石油ショックによる物価上昇パニック騒動は企業不信を人々に植え付けた。さらに、76年2月初め、米議会での暴露に端を発し、米航空業界と日本の政治家の癒着問題の発覚から田中角栄首相逮捕に至った戦後最大の疑獄「ロッキード事件」も、「朝日ジャーナル」ががっぷり四つで取り組む巨大なテーマとなった。

これら一連の報道は、「朝日ジャーナル」の紙価を高めた。78年4月7日号の創刊1000号記念号では、米国の経済学者、J・K・ガルブレイスとK・E・ポールティンクが特別寄稿をものした。翌79年3月の20周年記念号では、イギリスの歴史学者ジェフリー・パラクラフのほか、エドウィン・ライシャワー、ポール・スウィージー、イグ

ナシ・サックスの特別寄稿を2号にわけて掲載した。

2.3 保守回帰の流れに抗して

しかし、80年代から時代は保守回帰に向かう。80年6月の衆参同日選挙で、自民党が圧勝。すでに野党離れをみせていた無党派層は、いわゆる「私主義（ミーイズム）」や「生活保守主義」への傾斜を強めた。81年には、レーガン米大統領が登場。ソ連との「新しい冷戦」へ回帰した。日本は「西側の一員」としてシーレーン防衛を約束。中曽根康弘首相の『不沈空母』日本へと発展していく。戦争を体験している世代から軍事化路線を憂える声があがったものの、人々の多くは中流生活と既得権益を守ることを是とする「生活保守化」を強めた。「政治倫理は冷笑され、反核は無視される」（高瀬昭治編集長）に至ったのだ。

部数が7万部台に落ち込んだ退潮傾向に歯止めをかけるべく84年1月、筑紫哲也氏が編集長に起用された。筑紫氏は政治部員、ワシントン支局員、「朝日ジャーナル」副編集長などをへて、編集委員としてテレビ報道の世界に移った人気キャスターだった。「朝日ジャーナル」起死回生の切り札を期待されての登用と書いていいだろう。

筑紫編集長は創刊25周年記念号で、「朝日ジャーナル」は「第2世代」へ脱皮したと宣言している。その具体的な内容はインタビューで詳述するが、「第2世代」が意味するものは、「朝日ジャーナル」が主なテーマとしてきた政治や社会の問題に加え、新しい文化（カルチャー）にも焦点を合わせたことである。当時、多くの若者が興味を持った新しい演劇やニューアカデミズムを紹介した。「若者たちの神々」と題するロングランの連載記事で、若者たちが憧れる数々のロールモデルを登場させた。

一方、筑紫氏は、保守安定政権下にある政治状況に釘を刺す形で、福沢諭吉が残した言葉「多事争論」を編集方針のスローガンに掲げた。国際化の時代にあって国家的難事に立ち向かうには、一

致結束して足並みを揃えるべきだという風潮が強いときこそ、全く逆に多くの人が多くの事柄について争って論ずることが、誤った選択に突進させないための歯止めだという考え方である。ちなみに、この「多事争論」はその後、TBS系列テレビの報道番組で同氏の解説コラムのタイトルとなった。

筑紫氏を引き継いだ伊藤正孝氏と、最後の編集長となった下村満子氏も名物記者からの抜擢だった。伊藤氏は社会部時代にユーザーユニオン事件報道などを手がけた特ダネ記者。政治部員やアフリカ特派員となり、「朝日ジャーナル」誌上で数多くのルポをものしている。下村氏は、週刊朝日の編集委員として、アイアコッカやヘンリー・フォード、デービッド・ロックフェラーなど米財界の重要人物らを相手にしたインタビュー記事で鳴らす国際派ジャーナリストだった。

2.4 リニューアル途上での休刊

90年末、下村氏は出版局上層部から休刊（事実上の廃刊）を言い渡される。折しも「第2の創刊」と銘打ったリニューアルに取りかかっている最中だった。休刊の理由は、「赤字の額が経営上の、許容範囲を超えている。雑誌の寿命がきたのではないか」というもの。88年に朝日新聞社はもう一つの週刊誌である「AERA（アエラ）」を創刊しており、同じ社内で4つの雑誌が乱立する状況で、赤字額の大きい「朝日ジャーナル」を抱えきれなくなったことが大きな要因だったようだ。

下村編集長は92年4月24日号の巻末に「本誌の休刊について」と題する、読者に向けたメッセージを自ら執筆、掲載した。「筑紫哲也編集長が大幅な誌面刷新を行い、かなりの成果をあげました。引き続き伊藤正孝編集長も大変な努力をしましたが、残念ながら流れを変えることはできませんでした」と悔しさをにじませている。

取りかかっていたリニューアルの狙いは、「創刊時の『報道・解説・評論』の原点に立ち、メジャーなメディアが扱えない、あるいは見落とし

がちな少数意見を積極的に取り上げつつ、さらに時代と向き合う新しい過激さを持った雑誌として復活させること」だったという。

下村氏は「朝日ジャーナル」への思いを語り、読者にこう語りかけた。「新しい時代の過激さとは何か。単に政治的な過激さだけでなく、文化的な側面や、ライフスタイルなども含め、あらゆるラディカルが現在も存在すると、私たちは考えました。つまり、刺激的で、挑戦的な誌面を展開しようと考えたわけです。…（中略）…日本で週刊誌はたくさん発行されています。でも、『朝日ジャーナル』の類誌はありません。だからこそ、この雑誌のユニークな立場を大切にしていきたいと考えたのです。…（中略）…誌面に対する読者の方々からの評価や反応もかなり確かなものになり、ずいぶん励まされました。そうした矢先のことだけに、休刊決定はとても残念です。これまで応援して下さった読者の方々にも、申し訳ない思いでいっぱいです」。

かくして92年5月29日号をもち、同誌は33年に及ぶ歴史の幕を閉じた。

3. 筑紫哲也氏インタビュー

若者の知的虚栄心が支え

1984年1月に同誌編集長となり、誌面刷新に成功した筑紫哲也氏（当時、TBSキャスター）に、2007年1月17日午後、インタビューする機会を得た。

——右手に「朝日ジャーナル」、左手に「少年マガジン」と呼ばれるほど、若者に人気を博した時代がありましたね。

筑紫 「朝日ジャーナル」の創刊当時、左手に持たれたのが「平凡パンチ」。全共闘時代に持たれたのが「少年マガジン」でした。

——当時、どうしてそこまで売れたのでしょうか

か。読者にこびないクオリティーの高い雑誌だったのに、実際読まない人まで手に取ったのはなぜでしょうか。

筑紫 一言で言うと知的虚栄心。戦前からの教養主義に支えられた知的虚栄心ですよ。今の学生によく言うのは「君たちに欠けているのは知的虚栄心」だと。分からなくても、それにかじりついてみるということ。これは向上心でもある（当時、同氏は早稲田大学大学院公共経営研究科客員教授だった）。

すべての時代を通じて、若者にとって何が魅力かの基準は、かっこいいか、かっこよくないか。それは、今も昔も変わらない。当時、朝日ジャーナルを持っていることは、かっこよかった。知ったかぶりでガールフレンドにクラシック音楽のことを語ったり、哲学の話をしたりすることが、この人は教養があるんだなと思われて、かっこよかった。戦後、政治運動をすることはかっこよかった。ところが、70年代で学生運動がしぼんで、そうしたことが根暗でかっこわるいことになった。そこで会社（朝日新聞社）が冒険をして、僕みたいなのを編集長にした。

アートと文化の担い手に焦点

——「朝日ジャーナル」の編集長になったとき、どんな雑誌にしようと考えましたか。

筑紫 私がテレビの世界から活字の世界に戻り、84年に朝日ジャーナルの編集長になったとき、もう一度、「朝日ジャーナル」を若者が持っていてかっこいいものにしようと考えたんです。「若者たちの神々」という連載を展開して、要するに、文化とアートの担い手をロールモデルにした。60年代、70年代では政治を語ることがかっこよかった。それがかっこわるくなって、これに代わり、文化とアートがかっこよくなった。じゃあそれをロールモデルにして、最先端の情報を提供してやろうと。昔から政治性で買っていた読者は「変節

だ」と感じて、購読をやめた人もいただろう。

しかし、今でも印象深いのは、当時一番若い編集者が言った辛辣な言葉です。「政治性で買っていた古い読者にとって朝日ジャーナルは難破船の救命ボート。必ず食らいついてくる」という。だから新しい読者を取り込む方向性に間違いはないというんです。下村満子さん（最後の編集長）が失敗して、僕が失敗しなかったのは、僕が政治性、先鋭性、反権力の輪は残した上で、文化（カルチャー）というもう一つの輪を重視した「両輪論」だったことだと思っている。彼女は政治の輪を切り捨てて、行きすぎてしまった。

元々の読者から反発も

——どんなご苦労がありましたか。

筑紫 他誌の編集長を取材して、参考にさせてもらおうと編集長を取り上げる連載記事を載せた。しかし、調べてみてわかったのは、雑誌のモデルチェンジは成功した試しがないということだった。例外として唯一成功したのは、「週刊文春」をモデルチェンジした田中健五さん（当時編集長のち社長）くらいじゃないかな。彼はとポルノ小説とヌードグラビアを追放して、「週刊文春」を中年女性でも手に取れる週刊誌に変えた。結果は読者層が入れ替わっただけで部数は増えなかったけれども、それでも収支トントンで生きながらえている。だから、僕は全部変えることの危険性を考えて、「両輪論」にした。

——文化（カルチャー）路線に社内からの反発はありませんでしたか。

筑紫 「朝日ジャーナル」のシンプたちから随分たたかかれた。「若者すり寄りの軽チャー路線」だと悪口を書かれたし、社内で筋金入りの自分が左だと思っている人は、1ページも読まず、これ見よがしに「朝日ジャーナル」をくずかごに捨てた。

再スタートの手がかりを探すため、先輩の元編

集長たちを訪ねて歩いた。彼らの話によると、戦後、週刊誌の文化を作った週刊朝日の初代編集長、扇谷正造さんが、「朝日ジャーナル」創刊の話聞きつけ、初代編集長になりたがった。しかし、当時の社の経営者は「売れる週刊誌は扇谷君にやらせれば作れる。もっと志（こころざし）のある雑誌を作りたい」と彼を編集長にしなかった。「志の雑誌」とは、政治や社会を単に政治や社会だけの視点で切らないで、文化的な視点から解剖していくことだという。それを発見して僕は鬼の首を取ったように「オレが急にカルチャー路線を始めたんじゃなく、もともと創刊の精神に戻っているだけなんだ」と、その言葉を引っ張り出して、自分を守るために使った。（笑）

小劇場やニューアカデミズムを応援
——若者を数多く取り上げましたね。

筑紫 政治的に左や右の先鋭ではなく、当時、「新人類」と呼ばれた若者たちの前衛的なカルチャーを取り上げた。とくに新演劇の第三世代から第四世代。第一世代は寺山修司とか唐十郎とかだが、第三、四世代には鴻上尚史とか野田秀樹とか、渡辺えり子（のちに「えり」に改称）さんとか木野花さんとかが元気に活躍していた。既成演劇に反抗していった彼らの舞台を自分自身も見に行ったり、彼らの応援団だった。しかし、今彼らもメジャーになって、その後を追っかけている人たちがいるが、今彼らを取り上げるメディアがない。取り上げないとそのうねりも出てこないんですね。

「朝日ジャーナル」は小劇場の伴走者だった。いかに新しい人、まだ認知されていない人を世の中に出していくか。ステージとしての器として何をやるか。それが雑誌の性格や命を決める。ニューアカデミズムと呼ばれた浅田彰や中沢新一も取り上げた。もともと日本にあった「瓦版よみうり」として「この芝居が面白いよ」と太鼓を叩いて、もてはやすのもメディアの役割だと思う。

それがジャーナリズムの原点でもある。「にぎやかかし」というか伴走者。それが大衆に当たると雑誌は持つわけで、当たらないと持たなくなる。そういう繰り返しかなと思います。

——なぜ休刊しなければならなかったのでしょうか。

筑紫 朝日新聞社は当時、一柳東一郎社長のときに、ジャーナリズムから情報メディア産業になろうと間口を広げる方向にシフトした。しかし、逆に間口が狭くなった側面もあって、とんがったメディアを持ちきれなくなった。これが「朝日ジャーナル」休刊の背景にあったと思う。部数は増えなかったけれど、抱えきれないことはなかったが、社の首脳部がもう持ちきれないと判断したことが大きかった。とくに「アエラ」という雑誌を立ち上げたばかりだったこともあった。

「報道・解説・評論」が「朝日ジャーナル」の編集方針の柱だった。評論の中でも少数意見を、とくに先鋭性や前衛性を前面に押し出した。その例が左翼運動だったわけだけども。しかし、論に当たる部分がどんどん弱くなってきている。それは朝日新聞だけではなくて、日本のメディア全体での話だ。

朝日新聞社だから発行できた

——「朝日ジャーナル」を引き継ぐ後継雑誌は現れませんか。

筑紫 朝日ジャーナルがなくなったことによる空白を埋める何かが必要ではないかといろいろな人が言い始めて、哲学者の久野収さんから、僕が朝日ジャーナルをつぶしたわけではないのに、「お前にも責任があるんじゃないか」といわれて、「週刊金曜日」に参加することを求められた。「朝日ジャーナル」の後継をする雑誌として立ち上がったが、いかんせんマイナーにとどまっている。先鋭であり前衛であるにはエネルギーがいるんです

よね。ただキャンキャン叫んでいるだけではダメなんです。挑戦者としての能力が問われる。タイトルマッチだって防衛するより挑戦するほうが難しい。

「朝日ジャーナル」が休刊した後、今まで何が起きたかという、漠然と考えられている多数意見が全体を制するようになってしまって、情報は多いけれども、言論の多様性はどんどん損なわれている。

——朝日新聞社以外はこの分野の週刊誌に挑戦しませんでしたね。

筑紫 「朝日ジャーナル」の存在を一番気にしていたのは、実は読売新聞の渡邊恒雄さん（本社グループ会長・主筆）なんですよ。目の敵にすると同時に、これに対抗して右の雑誌を作ってやろうと何度か試行錯誤を繰り返したが、「殿ご乱心。道楽はやめてくれ」とばかりに周りから止められた。作ったって、もうかるわけないんだから。政治記者として、またワシントン支局時代からよく知っている仲で、会うたびに「朝日ジャーナルはけしからん」と言うから、「だったら読売ジャーナルを作ればいいじゃないの」とけしかけていた。「作りたいけど周りが聞いてくれない」とこぼしていた。（『This is Yomiuri』を作ったけれど…）彼が後になって中央公論を買収したのも、左翼コンプレックス、朝日コンプレックスによるものだと思う。しかし、「週刊朝日」に対抗して読売が「週刊読売」を、毎日が「サンデー毎日」を創刊することはできても、「朝日ジャーナル」に対抗する雑誌を創刊することはできなかった。それがいかに難しかったかということだ。朝日新聞とくにあの時代の朝日新聞社だったから出来たことでしょうね。

番組作りも雑誌編集者根性で

——筑紫さんのテレビジャーナリストとしての原点は「朝日ジャーナル」ではないですか。

筑紫 僕は新聞記者が一番長くて雑誌編集者を2回やってテレビにきたが、一番短いにもかかわらず、自分の本質を作り上げたのは雑誌編集者の経験だった。テレビに移った時も、「朝日ジャーナル」をくずかごに捨てられたときと同じような批判を局内で受けたことがある。テノール歌手パバロッチェのインタビューを特集したところ、「何でこれがニュースなんだ」と叩かれた。まだ三大テノールが騒ぎになる前ですから。「なんでオペラ歌手のインタビューがニュースなんだ。世間で多くの人が見ているわけでもないのに」と。硬派のニュースが大事だと思われる時代だった。立花隆さんと渡辺昇一さんが大立ち回りをやってくれば大成功というのが大勢だった。しかし、「番組という場所、ここはステージなんだ。いい演技をして帰ってくればいいんだ」という僕の考えは、雑誌編集者の感覚ですよ。一番自分の癖みたいなものを作ったのは雑誌編集者だったと思う。

テレビに出る人にも、自分がアクターになりたい、自ら舞台上で演じたい人がいる。同じキャスターでも久米宏さんはそういう人でしたね。CMに行く前に、最後の決めゼリふを自分で言うことで、その場面のすべてをさらってしまう。彼にとって出演者は自分が演じるための素材なんですよ。しかし、僕の場合は、出演者に面白いことを言ってもらい、いい演技をしてくれればいいわけで、「なんて馬鹿な質問をするのか」と言われても、相手から重要なことを引き出せれば、こっちの勝ちだと。これは編集者根性だなとつくづく思います。

4. まとめ

「朝日ジャーナル」は、戦後の日本が、日米安全保障条約の下で経済成長の道をひた走る中で見過ごされた「負の部分」に焦点を当ててきた。公害や基地問題、核拡散問題などを巡り、当時の日本を代表する論客が縦横に健筆を振るう場を与え

た。筑紫氏のインタビューにあるように、「朝日ジャーナル」は「売れる雑誌」ではなく「志の雑誌」として世に送り出されたのだ。創刊時の編集方針「報道・解説・評論」の中でも「論」に当たる部分に力を入れてきた。敗戦により言論の自由を獲得し、国情も安定し始めた1959年、日本国民が自らものを考え、発言し、実行していくための道標として誕生したとっていいだろう。

「朝日ジャーナル」はつねに、世に出る一步手前の若者たちの良き同伴者でもあった。60年安保のデモを詳細に伝え、冷戦時代における日本の立脚点を模索する様々な考え方を俎上に載せた。70年安保を軸にした新左翼運動にも理解を示し、既成の社会的枠組みに異を唱える若者たちの活動を、政治から文化にいたる幅広い視点から描写した。

連合赤軍事件や内ゲバなどが相次ぎ、未曾有の経済成長を成し遂げて、政治問題に対する情熱から冷めた国民が、個の生活に関心を移した80年代、「朝日ジャーナル」は、若者たちが興味を示すカルチャーに照準を合わせ始める。小劇場における新しい演劇活動の芽生えや、ポストモダン主義などのニューアカデミズムを紹介していった。既成の枠組みから飛び出し、新しい道を切り開く前衛、先鋭のパイオニアたちを応援するメディアだった。だからこそ、片手に携えていて、かっこいい雑誌だったのである。

筑紫氏が言うように、その「かっこよさ」を支えていたのは若者たちの知的虚栄心だった。政治運動を熱く語るかっこよさ、難解な哲学用語を駆使するかっこよさ、音楽やアートを斜めに切ってみせるかっこよさ……。戦後40年、若いインテリたちが辿った「かっこよさ」が、これに魅せられた若者たちをして「朝日ジャーナル」を手にとらせたのだ。そこに知ったかぶりの虚栄の姿勢がない交ぜになっていたからこそ、一つのファッションとして定着したに違いない。

戦後から現在に至る雑誌の歴史に詳しい元電通雑誌局の吉良俊彦氏（ターゲット・メディア・ソ

リューション代表）は、学生運動盛んなりし頃、「朝日ジャーナル」のコア読者層は、運動の中心にいる学生たちではなく、そこに積極的に参加できない学生たちであったと指摘する。すなわち、運動に付き合いでときどき参加するけれども特定のセクト（分派）に所属しない「ノン・セクト」や、政治活動そのものから一歩離れたところに身を置く「ノン・ポリティカル」（ノンポリ）な学生たちだったという。

就職を控え、機動隊との衝突や逮捕歴を持つハンディを背負いたくはない。こうした本音を持つ、ややひ弱と見られがちだったインテリ学生が、「朝日ジャーナル」の「政治や社会を文化（カルチャー）で切る」（筑紫氏）視座をもって、運動に突き進む学生たちと一線を画し、その足場を保っていたと言えないだろうか。

その後、世はバブルに酔いしれ、ビジネス情報系の新聞、雑誌が力を増した。一般紙を発行する新聞社も、評論を重視したジャーナリズム産業から、市場主義社会で付加価値のある情報を扱う情報メディア産業へ、事業の重心を移し始めた。「志の雑誌」も、「売れる雑誌」でなければならなくなったのである。朝日新聞社が「朝日ジャーナル」の休刊を決断した92年は、まさにその時代への変節点だった。

95年のインターネットの本格的な登場により、メディアはテレビ、ラジオ、新聞、雑誌のマス媒体に加え、さらに多様化した。若者を中心にした活字離れは著しく、新聞の購読者数は年々減り、街の本屋は次々店終いした。教養主義は廃れ、知的虚栄心を持つ若者は一部に過ぎない。人々は消費や欲望に直結する情報を求める方向性をこれまで以上に強めてきている。こうしたメディア消費の状況を反映して、世論が単純な一つの意見や報道に流され、収斂されていく傾向に、筑紫氏自身も懸念を隠さなかった。

ネット社会についてテレビ番組で筑紫氏が言及した言葉が物議を醸したことがある。1999年の番組上でインターネットの言説を「便所の落書きも

同然」と表現し、2チャンネルなどで批判を浴びた。

同氏の価値観を付度すると、インタビューにもあったように、テレビニュースの即時性に対し、翌日の新聞でじっくり解説や背景を読む「熟慮」のメディア性を重視したことは間違いない。言い換えれば、同氏は紙のジャーナリズムの世界から、電波ジャーナリズムの世界へ移り、紙の価値観をもって、電波の世界を泳ぎ切ったのである。

その価値観からすると、問題発言からすでに十数年たつ現在、高度なレスポンスと大量な情報が流れるように進化したネット社会は、ますます人々にじっくり物事を考える余裕を失わせ、瞬時に形成された多数意見に流れこませる危険性があるだろう。筑紫氏が説いた「多事争論」の意義はさらに重みを増すに違いない。

インタビューの終わり際に筑紫氏が残した言葉を紹介する。

「テレビやインターネットは即座に起きた情報を伝えてくれる。活字メディアは、『目に映りしものの向こう側にあるものを映し出す』ものだ。ヤクルトが勝っても、その結果はテレビで分かる。しかし、翌日新聞を開いて、『なるほど、だから勝てたのか』と納得する。だから活字メディアのマーケットは確実に存在する」。

「報道・解説・評論」を掲げた雑誌の復刊も期待できないわけではないのだ。

<付記>

「朝日ジャーナル」は創刊50周年にあたる2006年4月14日、週刊朝日緊急増刊として単発で復刊、発売された（一部地域を除く）。部数は5万部。「怒りの復活」と銘打たれた復刊号の巻頭言「風速計」で、山口一臣・週刊朝日編集長（当時）は「この国への強い危機感/「知的虚栄心」と「知の復権を」と訴えた。

格差や貧困に象徴される、日本型社会システムの破綻（はたん）をテーマに、評論家の柄谷行人氏や作家の高村薫氏、ジャーナリストの斎藤貴男

氏が論考を寄せ、「新人類の旗手たち」に登場した秋元康、辻元清美、中森明夫の3氏が「同窓会」と題して対談した。「論座」「月刊現代」などオピニオン誌や総合誌の休刊が相次ぐなか、山口編集長は「立ち止まって物事を考える材料を提示したい。無謀な挑戦かもしれないが、活字への飢餓感もあるのではないか」と話した。（朝日新聞デジタル2006年4月11日などから抜粋）

また朝日ジャーナル復刊版は不定期にこれまで第5弾までが発行されている。第2弾は「日本破壊計画—未来の扉を開くため」（2011年3月19日）、第3弾は「人間と原発」（2011年6月5日）、第4弾は「朝日ジャーナル 政治の未来図」（2011年10月14日）、第5弾は「わたしたちと原発—セシウムは移動する」（2012年3月9日）。

【注】71年8月22日午前1時、埼玉県の陸上自衛隊朝霞駐屯地をパトロール中の一場哲雄2曹（当時陸士長）が右腕2カ所を鋭い包丁で刺されて死亡しているのが見つかった事件。埼玉県警の捜査で、主犯格の京浜安保共闘活動家と自称する元日大生、菊井良治容疑者ら数人が逮捕されたが、菊井容疑者の自供から、72年1月、朝日新聞出版局「朝日ジャーナル」編集部記者が証拠隠滅の容疑で逮捕された。『朝日新聞社史』によると、「朝日ジャーナル」編集部記者への容疑は、菊井が事件直後の8月23日、以前から知り合いだった同記者に朝霞事件の原稿を売り込みにきて、自分たちが殺害したという証拠として一場2曹から奪った「警衛」の腕章と擬装用の自衛官のズボン一本を同記者に預けたが、事件発覚後、同記者は預かった腕章などを、事情を知らない出版局の友人に頼んで焼却したというものだった。同記者も埼玉県警の取り調べにこの事実を認めた。朝日新聞社は1月19日付で「取材活動を逸脱した行為であり、本社の服務規定に反した」として同記者を退社処分にし、翌20日付朝刊でこれを発表した。さらに、2月1日付の朝刊に「再びこのような不祥事を起こさぬよう対策を立て、直ちに実行することにし

ました」との決意を述べた社告を載せた。

<参考文献>

- ①朝日ジャーナル84年4月15日臨時増刊号「25年の軌跡 朝日ジャーナルの時代 1959…1992」朝日新聞社
- ②朝日ジャーナル決算収支表（80年4月～92年3月）朝日新聞出版本部出版販売部資料（社外秘）

【資料 主な歴代編集長のコメント】（いずれも朝日ジャーナル84年4月15日臨時増刊号「25年の軌跡」より）

和田 齊 1959年2月5日～64年1月31日
創刊号とICBM「……創刊された1959年はICBMが開発されて、米ソによる宇宙時代への優劣争いが開幕された時期であった。ソ連がICBMの実験に成功したのは1年半前の1957年で、アメリカがすぐにこれに追いついて成功した。（中略）朝日ジャーナルはこの時期に生まれ、報道、解説、評論の三本を柱として表紙に出して、特色をうたった。創刊当初から加藤周一、辻清明、篠原一、高見順、美濃部亮吉、都留重人らの諸氏の同志的熱烈な参画を受けて記事企画を行い、討論したものを、編集部員がまとめて記事にしていた。しかし、との匿名形式は間もなく筆署名を表に出す形式に改めた。日米安保条約の延長には反対派のデモと鎮圧する警官隊が国会議事堂周辺で衝突し、女子学生が1人死ぬ事件にまで発展した。これを記録した号は即日売り切れ、増刷するほどであった。（後略）」

岡田 任雄 64年2月1日～65年5月1日
草の根を知る「初代の和田編集長のもとで部数が増え、上昇に向かったとき、幸運にも二代目になったので、部内の空気は明るく活気に満ちていた。創刊当時は、取材や寄稿依頼のさい、いちいち『朝日ジャーナル』なる雑誌を説明しないとけなかつ

たが、いまは名刺を出すですぐ分かってくれるようになった—と部員諸君がうれしそうに言っていた。『草の根民主主義』（グラス・ルーツ・デモクラシー）という言葉がはやり出したのは、厳密には60年安保の直後だといわれるが、不勉強のぼくとしては、ジャーナルで部員諸君が取材先から帰ってきて、しきりにそれを言い出すのを教えてもらった次第である。（中略）連載ものとして『町の政治・むらの政治』『草の根の教師たち』を設けたり、第1次臨調（池田内閣当時）の答申中、地方分権化のくだりに声援を送ったりした。が、二十数年たった今日でも、その主張が実らず中央集権体制のままなのは残念ではない。若い世代を主な読者対象とするジャーナルに歴史ものを持ち込むことはどうかと思ったが、目先を変える意味で『昭和史の瞬間』を連載した。歴史ものブームがその後興ったことを考えると、そう見当はずれでなかったようにも思う。」

横田 整三 66年7月23日～67年8月31日
安保中間期の日々「……私は幸運な編集長で、誌勢は上向きだし、副編集長からの横滑りであって、とくに気を使って何か新しいことをやる必要もなかった。ただ漫然とお神輿に乗ってればよかったわけだ。（中略）徳川時代なら、さしあたり4代将軍家綱か5代将軍綱吉というところであろうか。いずれにしても、守成の君といってしまうえば聞こえはよいが、なにもしなかった編集長といわれたそうで、いまだに内心忸怩たるものがある。とはいっても、世の中は狂濫怒涛の時代である。第1次安保闘争から第2次安保闘争の中間段階であり、樹静まらんと欲すれども風息まず、という有り様であった。そんななかであって、ワンポイント・リリーフのつもりが1イニングもったということは、やはり運がよかったのではなからうか。しかし、やはり守成というより、波間に漂って大過なく過ごしてきたというのが当たっているのではあるまいか、と思う」

玉利 勲 72年1月1日～73年3月31日

厳冬の氷雨の中で「1972年1月1日、『ジャーナル』編集長を命じられ、私は編集局から出版局に移った。8日、はじめて編集部会に出席し、そのあと最初のデスク会が深夜におよんだ翌9日、編集部員K記者逮捕の報が飛び込んだ。陸上自衛隊朝霞駐屯地の自衛官殺害事件に関する証拠隠滅の疑い、であった。当時、『ジャーナル』の新左翼的傾向の『行き過ぎ』が問題となっていたが、これに追い打ちをかける事件であった。編集部には非難の電話や投書が相次いだ。2月19日、連合赤軍による浅間山荘事件、つづいて、かれらによるリンチ殺人事件の発覚。一部の週刊誌は『ジャーナル』を目して、“連合赤軍の培養基”とさえ書いた。販売部数の低落傾向は加速度を増し、加えて広告量の激減による兵糧攻めがあった。廃刊せよ、との声も聞こえた。まさしく『ジャーナル』存亡の危機であった。混乱の中で出した創刊13年の記念号（3月17日）でわたしは次のように書いた。『……13年の足どりを顧みるとき、つねに創刊の志を高く掲げながらも、激しく揺れ動く現実を追究する努力のなかで、本誌もまた、いくたびか模索と試行を繰り返したことを率直に認めなければなりません。これについては、長年の読者から、痛切なご意見と励ましをいただきました。そのことに思いを致すとき、私は、早春の季節とはいえ、厳冬の氷雨の中に立ちつくしているような思いに駆られます。』 たがいに傷つけ合うことも辞せず、『ジャーナル』再生のため、編集部全員の血みどろの日々。年が明け、低落傾向にも歯止めがかかったとき、私は辞任を決意した。肉体も限界状況に近かった。4月1日、尾崎正直記者にバトンを託した。今も決して風化することのない1年3カ月であった。』

尾崎 正直 73年4月1日～74年7月31日

米民主主義に乾杯「編集長としての初仕事は、恒例の読者論文のテーマを決めることだった。しかし、その『私にとっての企業』論文に『クルマな

き社会への指向』というタイトルで投稿して入選した、自動車メーカーに勤める田中公雄さんが、オーナー社長の逆鱗にふれて退職を余儀なくされようとは。ご当人も『クビにすることはあるまいという常識的な判断が通用しなかったのは、企業内部のマスヒステリーにあった』という分析を寄稿したが、これは一企業だけでなく、当時の日本、さらに世界のセンチメントをかなりの確にとらえていた。米国では、史上最悪の政治スキャンダルといわれたウォーターゲート事件が明るみに出て、本誌も上院公聴会の記録や筑紫哲也ワシントン特派員の現地報告で、しつよいと思われる程の報道を続けた。そして、第4次中東戦争に端を発した石油ショックで、世界のマスヒステリーは絶頂に達した。だが、年が明けると、あれほど危機が騒がれた石油が実は前年の同期より多く輸入されていたことがわかり、パニックはおさまったが、物価の値上がりと企業への不信だけがおりのように残った。わたしにとってのせめてもの救いは、証場を追われた田中さんが東京都庁に再就職できたことだった。価値観が多様化した社会では、異端を包容するふところの深さこそ貴重である。編集長を離れた9日後に、ニクソンもホワイトハウスを去った。米国の民主主義の復元力に、私は乾杯した。』

宮下 展夫 77年4月1日～80年7月31日

20周年のころ「『1959年に朝日ジャーナルが創刊されてからの20年間は、劇的な変化の時代であった』。トインビーの後継者といわれるイギリスの歴史学者ジェフリー・パラクラフ教授は、創刊20周年記念号のための特別寄稿『世界史の転換点に立って』を、こう書き出している。私の編集長在任1年目で、『朝日ジャーナル』は創刊千号を迎え、2年目に20周年を迎えた。千号記念号では、J・K・ガルブレイスとK・E・ポールティンクという世界的な学者に特別寄稿をお願いした。内心ではかなり難しいかと思っていたが、本社論説顧問の都留重人氏のお口添えもあって、すばらし

い論文が届いた。いまでも、その格調の高い、そしてわかりやすく、視野の広いお二人の論文を手にした時の感激が忘れられない。部数が急激に伸びたことも印象的だった。20周年記念号では、これに味をしめて、パラクラフ教授のほかエドウィン・ライシャワー、ポール・スウィージー、イグナシ・サククスという欧米の代表的な学者に特別寄稿をお願いして、すべて承諾してもらったため、2号にわけて掲載するという、ぜいたくなことになった。特別に高い原稿料を支払ったわけではなかったが、その後も各国の学者にお願いした原稿は、どれも快く執筆していただいた。断られた唯一の例は、リースマン教授だったと思う。『朝日ジャーナル』という雑誌に対する（それは朝日新聞に対してであるけれど）海外の著名な人々の評価の高さに驚き、とてもありがたいことだと思った。」

高瀬 昭治 80年8月1日～84年1月14日

ミーイズムの時代「80年代は『保守回帰』ムードで幕を開けた。80年6月の衆参同日選挙は、保革伯仲の予想をくつがえし自民党が圧勝、安定多数による保守回帰の政治的基盤を用意した。すでに野党離れをみせていた無党派層は、これをきっかけに、いわゆる『私主義（ミーイズム）』や『生活保守主義』への傾斜をつよめた。81年、『強いアメリカ』をめざすレーガン米大統領の出現は、国際的には『新しい冷戦』への回帰を意味した。経済大国日本は『西側の一員』としてシーレーン防衛を約束、それは中曽根首相の『不沈空母』日本へと発展した。戦争を知っている世代からは、新たな核配備や日本の軍事化を憂える声があがった。また、韓国、中国からは、教科書検定に示された日本人の歴史感覚が糾弾された。だが、そうした声は、いまの『中流』生活と既得権益を守ることに熱心な生活保守派によっては、どうでもいいことであった。かくして『荒れる中学』は放置され、『政治倫理』は冷笑され、『反核』は無視された。そして、この事実は、戦後の歴史が生み育

てた『あだ花』ではなく、まさにわれわれの戦後“民主主義”社会そのものが生みだした嫡子であると思う。『いまの生活には何ひとつ不満、不自由はありません。多分、最高の生活でしょう。ということは、これからはもう、これ以上の生活はできなくなるということです。私たちは人類の滅亡へ向かって、少しずつ進むしかないのでしょうか』——こう語った青年の言葉に、私は80年代の空気を讀んだ。」

筑紫 哲也 84年1月15日～87年4月1日

『多事争論』を求め、第二世代を歩む「一世紀、半世紀、四半世紀と時代を区切るのはもともと西欧流の発想でしょう。10年区切りの年代論を含めて、こういう区切り方に限界があることはこれまでしばしば指摘されてきたことです。人間や社会の営みは、そういう人為的区分に関係ない連続性を持っているからです。しかし、創刊25周年に当たり、その歩んできた四半世紀をたどってみると、その間に時代が大きく動いていったことをあらためて感じます。創刊された1959年（昭和34年）は、『60年安保』と、この国が高度経済成長に驀進する前夜に当たります。この経済繁栄は人々の暮らしを向上させましたが、一方ではさまざまな“負の遺産”を持っていました。公害、住民運動、環境問題など。それに連なるテーマをいち早く、もっとも鋭く追及してきた雑誌が本誌であるといっても、そう手前味噌ではないと思います。いま、一部のメディアで『全共闘』がちょっとした回顧ブームとなっていますが、あの時代をもっともヴィヴィッドに伝えたのも本誌であったと思います。この記念号を編むに当たって、紙数の制約のため泣きたい思いで割愛した、いろんな優れた論文、ルポ、エッセーなどを見渡しながら、『本当によい雑誌、貴重な雑誌なんだなあ』という感慨にとらわれました。もちろん、そこには手前味噌の部分が含まれています。私が社会に出て、この会社に入った年に誕生した雑誌であり、数え切れないほど寄稿してきた雑誌であり、かつて編集部

に身を置いたという個人的感情と愛着があります。他方、新任編集長としての不遜をあえて冒すとすれば、本誌がつねに時代をつかみ続けてきたろうか、あるいはそのつかみ方が正鵠を射ていたのだろうか、という疑問を率直なところ感じもします。このことは、本号の歴代編集長の弁のなかにも、にじみ出ていると思います。それは、このような論を張り、主張を打ち出しながら作っていく硬派週刊誌の宿命のようなものでしょう。試行錯誤をおそれて、この種のメディアの生命はありません。その過程で誤りを当然冒すでしょう。大切なことは、この試行錯誤の過程のなかから、何を学び取り、どう決算をして前へ進むかでしょう。数日前に発売された号（4月13日号）から私たちの雑誌は『第二世代』に入りました。表紙に始まっては、誌面全体に大幅な改変が施されています。私なりに、『第一世代』と『第二世代』の本誌を通底しているもの、伝統として引き継ぐことにしたいと思うものを一言で言わせていただくとすれば、『多事争論』ということだと思っています。開国——いまでいう国際化——に当たって、そのような国家的難事に立ち向かうには、みんなが一致結束、足並みを揃えるべきだという風潮が強い時に、福沢論吉は全く逆に、多くの人が多く的事柄について争って論ずることが、誤った選択に突進しないための歯止めだと説いたのです。ひとつの方向になだれを打つように動いていく私たちの社会の特性——マスメディアを含めての話ですが——や、『安定政権』（実際は保守政権）こそがいま必要だと説くメディアが生まれる時代にあって、『多事争論』はいまこそ、もっと必要だと思われるのです。本誌の伝統と特性をさらに発展させて、この道をさらに追求したいと思います。」

下村 満子 90年5月1日～92年4月

本誌の休刊について

朝日新聞社は15日付で、本誌『朝日ジャーナル』を5月いっぱいまで休刊することを決めました。休刊問題が一部で報道されて以来、読者のみなさん

からたくさんのお問い合わせや励ましの手紙をいただきました。それらにお答えする形で、本誌編集長が休刊の決定に至る経過と考え方をご説明します。

「どうして休刊になるんですか？」

発行部数の低迷で赤字がかさみ、発行を続けても好転する見通しが立たない、というのが、休刊についての出版局上層部の説明です。

朝日新聞社は、広告収入の急速な落ち込みなど厳しい経営状況の中で、不採算部門の見直しを進めている、『朝日ジャーナル』の休刊はその一環で、具体的には、『朝日ジャーナル』の部数が最近では6万部を割り込み、年間数億円に達した赤字をこれ以上放置するわけにはいかないと判断した、というものです。

また、「赤字も大変だが、部数の長期低落からみても、残念ながら『朝日ジャーナル』の歴史的な役割は終わったのではないか」とも言われました。

「『ジャーナル』がなくなってしまうなんていやです」

私たち編集部にとっても、あまりに突然の決定でした。

『朝日ジャーナル』が採算上とても厳しい状態にあることは去年秋から聞かされていましたが、今のままで継続することは非常に難しい、赤字を少なくする抜本的な方法を考えてほしい、という話を出版局上層部から聞かされたのは1月下旬でした。編集部は1月からの新連載をすでにスタートさせ、ひきつづき4月からの新連載と誌面刷新を準備中でした。

もちろん責任者である私自身も、この雑誌の休刊について話を聞かされたことは一度もありません。ただ、朝日新聞社が不採算部門の『朝日ジャーナル』もその一部であるという認識は当然ありました。この状態を続けるわけにはいかないということで、編集部内でも議論している最中で

した。

約1カ月後、出版局上層部との2度目の話し合いがあり、現状の赤字を解消する具体的方策がなければ『朝日ジャーナル』の休刊を考えざるを得ない、という説明を受けたのです。「休刊」という言葉が出たのは、このときが初めてでした。理由は、「赤字の額が経営上の、許容範囲を超えている。雑誌の寿命がきたのではないか」ということでした。

私たちは大変な衝撃を受けました。その判断の根拠には多くの疑問を感じましたので、上層部と何回かの話し合いの場をもち、激しいやりとりもありました。

昨年1月のリニューアルからわずか1年しか経過していません。でも、私たちは新しい雑誌作りにかすかながら確かな手応えを感じていました。同時に、これまで応援してくださっていた読者や、社外の執筆者の方々に対する責任もあり、編集部としては、せめて判断を秋口まで延ばしてほしい、という案を出しました。残念ながらそれも「回復の可能性がない」ということで受け入れられませんでした。

この間、一部のマスコミで休刊問題が伝えられたこともあって、多くの読者の方々から、お手紙や電話をいただきましたが、私たちは最後まであきらめずに話し合いを続けていたため、今日まで詳しい説明をすることができませんでした。

「休刊はほんとに赤字が理由なんですか？」

『朝日ジャーナル』は、1959年3月に創刊され、1960年代の後半には27万部近い発行部数を誇り、多くの読者に支持をいただいた雑誌でした。

しかしこの17、18年、ずっと赤字が続く状況でした。でも、週刊誌ジャーナリズムの中でこの雑誌が持つユニークなポジションや存在意義を大切に考え、たとえ赤字でも存続の必要性はあるという認識で、朝日新聞社が今日まで発行を続けてきた雑誌です。

もちろん、赤字幅縮小と部数増大の努力を怠っ

ていたわけではありません。84年に筑紫哲也編集長が大幅な誌面刷新を行い、かなりの成果をあげました。引き続き伊藤正孝編集長も大変な努力をしました。が、残念ながら流れを変えることはできませんでした。

とりわけ、88年に朝日新聞社はもう一つの週刊誌である『アエラ』が創刊され、同じ社内で四つもの週刊誌が乱立するという状況が生まれました。それが、結果的には社外との競争以前に社内での過当競争を生み、それぞれの編集部員を苦闘させることになりました。私はこうした状況について、疑問を投げかけたこともあります。

90年5月に私が編集長を引き継いだときには、発行部数はすでに7万部台になっており、厳しい状況にあることは明らかでした。

私にとって選択の道は二つしかなかったといえます。一つは、それまでの2代の編集長が行った手直しを継続して進めるという道。もう一つは、第2の創刊に近い新しい雑誌への転換をはかる道でした。結論として、この雑誌を末永く存続させるためには、これからの時代を担う若い世代をもっと読者として獲得しなければならず、そのためには思い切った転換が必要だ、というのが私の考えでした。

ただし、それには広告、販売部門を含めた朝日新聞社全体が本気で腰を据えてかからなければなりません。費用もかかります。時間もかかります。この点については出版局上層部とも話し合い、リニューアルに踏み切ったのです。ですから、少なくとも1年後に答えを出すといったことは予測していませんでした。

私に与えられた命題は、長期的な展望に立ってこの雑誌をどう転換していくかだ、と理解していました。厳しい競争下に置かれている雑誌界にあって、短期決戦型の「魔法の杖」は存在しません。

そのためには、まず編集部員の意識改革を含め、基礎から変えていく必要がありました。古くからこの雑誌を支えてくださっていた読者の中に

は違和感を覚え、席を立っていかれる方もいるかもしれないと覚悟しておりました。しかも、新規の読者が定着するには時間がかかる。そうしたリスクも考えた上での、誌面刷新だったのです。「第2の創刊」と銘打ったのは、そんな理由からでした。

それには、特別な宣伝費も必要でした。また、再生紙の使用や印刷方式の変更、さらにビジュアル化を図るためにいろいろなことも試みました。それは、あらかじめ上層部も理解しているとの認識のもとに進めた作業でした。

したがって、1年後に「赤字が膨らんだから、耐え切れない」というような話には、納得できない部分がありました。「リニューアル後1年間はじっくりみた」というのが出版局上層部の考え方のようですが、私たちの認識とは、大きなギャップがあったということです。

「ずいぶん誌面が変わったと思っていたんですが……」

リニューアルにあたって、「新しい時代の雑誌」とは何なのか、『朝日ジャーナル』のアイデンティティーは何なのかを編集部は模索し、議論し続けました。朝日新聞社が四つの週刊誌を発行する中で、他の雑誌と競合しない形でこの雑誌をどこへ、どうリニューアルするべきなのか。

「第2の創刊」でしたが、だからといって、売り上げ部数を上げるためならどんな記事でも載せるといふわけにはいきません。議論の末、私たちが得た結論は創刊時の「報道・解説・評論」の原点に立ち、メジャーなメディアが扱えない、あるいは見落としがちな少数意見を積極的に取り上げつつ、さらに時代と向き合う新しい過激さを持った雑誌として復活させることでした。

新しい時代の過激さとは何か。単に政治的な過激さだけでなく、文化的な側面や、ライフスタイルなども含め、あらゆるラディカルが現在も存在

すると、私たちは考えました。つまり、刺激的で、挑戦的な誌面を展開しようと考えたわけです。

日本で週刊誌はたくさん発行されています。でも、『朝日ジャーナル』の類誌はありません。だからこそ、この雑誌のユニークな立場を大切にしていきたいと考えたのです。もちろん、現状ではこの種の雑誌は大部数は期待できません。一方で、大きな赤字は許されない、という矛盾した課題を私たちは抱えてきました。

それがこの雑誌に与えられた宿命であると同時に、存在意義でもあり、それは朝日新聞社のポリシーでもあると理解していたのです。

「編集部のみなさんの気持ちは？」

私たちも、『朝日ジャーナル』が新しい時代の雑誌として完成されたものになっているとは、決して思っていない。これまで『朝日ジャーナル』が築き上げた33年に及ぶ歴史と伝統、その強烈なイメージが想像以上に大きなものであったことも事実です。

ただ、手探りの1年を経て、ようやく、ある手応えを感じ始めたところでした。私たちにはやりたかったこと、すでに準備中のこともたくさんありました。誌面に対する読者の方々からの評価や反応もかなり確かなものになり、ずいぶん励まされました。そうした矢先のことだけに、休刊決定はとても残念です。これまで応援して下さった読者の方々にも、申し訳ない思いでいっぱいです。

でも、最終号の5月29日号（5月21日発売）まで、あと4号あります。私たちは、最後まで今までどおりの誌面作りを続けるつもりです。それは、私たちが新しい時代の雑誌を目指していたからであり、しかもそれが未完であったという思いが強くあるからです。

どうぞお付き合いください。

（1992年4月24日号から）